

【最優秀賞】

田舎で暮らす

上村 萌々香（宮崎県 宮崎県立宮崎西高等学校 2年生）

祖父母の家へ通じるぐねぐねとした日南海岸。それは、十年前の私にとってはいつもより長く感じられたのではないか。今思い返すとそんな気持ちになる。

妹は病気のため、一歳のとき東京で手術を受けた。だが、術後の回復が悪かったので、両親は東京にとどまった。だから、幼稚園生の私は祖父母の家に預けられることになったのだ。

祖父母の家で最初の夜に見た夢を今でも鮮明に覚えている。幼稚園の駐車場にぼつんと座っている私。ふと顔をあげると、同級生たちは皆、手をつないで隣にある小学校へ歩いていく。私は追いかけることもできずに、ぼんやりと座っていた。

そのときの私の一番の不安は、今となっては笑ってしまいが、「幼稚園をちゃんと卒園できるのか。」ということだった。私達の住む宮崎市から祖父母の家がある日南市まで、車で一時間ほどかかる。だから私は、年長さんのときに幼稚園に行った記憶があまりない。本当なら病氣と闘っている妹のことを第一に考えなければ

いけないが、幼かった私は自分のことばかりが心配だった。

だが、そこはやはり幼稚園生。自然がいっぱいの祖父母の家で遊んでいるうちに、そんな不安も消えていった。そして豊かな自然、周囲の優しい人々から、ぐんぐん伸びていく植物のようにたくさんのお話を吸収していった。

たくさん遊び、たくさんのことを経験した。庭に停まった祖父の軽トラの荷台に従兄と乗り、祖父と対戦したドッジボールが私のお気に入りの遊びだった。私はこれを「じいじドッジボール」と名付け、ほとんど毎夕、これをして遊んでもらった覚えがある。軽トラの荷台の上というのは不思議なもので、普通の台とは違い、何となく船の上にいるような感じがする。揺れるからだろうか。船の船員に変身した私と従兄は、悪徳な海賊であるじいじをやっつけるため、「大砲！」と叫びながらボールを投げていたものだ。こんな暴れん坊の私たちにつき合ってくれていた祖父の体力にも脱帽である。

親戚のおじさんの家の近くの山でたけのこを採ったこともある。そこで私は、竹というのは獣のような匂いがすることを知った。竹林の中に入ると、鼻にむうんと獣の匂いが入ってきた。獣の匂いといっても臭くはなく、かぐと何となく落ち着いた。どんなふうにしたけのこを採ったのかは全く覚えていない。ただ、その匂いだけはずっと頭に残っている。今でも家の近くでその匂いをかぐことがある。塾から帰ってきた夜、湿り気のある風がその匂いをまよって鼻孔をくすぐる。家の近くには小高い丘があり、そこにある竹林から漂ってくるのだろう。その匂いをかぐと、十年前のあの林の中に戻ったような気持ちになる。

今はとても苦手な虫も、幼い頃にはたくさん触れたり、じっと観察したりしていた。従兄が飼っていたメスのクワガタに指を狭

まれたこともあった。メスだからといってあなどり、指を伸ばしたところ、小さなあごで思いつ切り狭まれた。どれだけふり回しても取れず、従兄にとつてもらった。なかなか執念深い女であった。それからというもの、クワガタ（特にメス）はトラウマになって、見るのも触るのも苦手だ。

捕まえたチョウが死んでしまったのも衝撃的だった。虫カゴに入れて、ゼリーを与えていたが、死んでしまった。庭の片隅にそつと亡骸を置いていたのだが、しばらくして見ると姿がない。あれ、と思つてよくよく探してみると、死んだはずのチョウが歩いている。びつくりして近付いてみると、チョウは歩いているのではなく、自分より小さなアリに運ばれていたのだ。アリはどんどん歩いていき、やがて巣にたどり着く。そしてチョウを抱えたまま、巣に入ろうとした。そこから先の記憶はない。翌日、巣の近くで見た、巣に入りきらずに破れた羽の白色と、昆虫ゼリーの緑色と桃色とオレンジ色は、今でも目に焼き付いて離れない。

日南の家で体験したことは今の私を形づくっていると思う。正直、小学校の頃のことでも忘れていたことはあるが、日南で体験したことの多くは、まるで写真に撮られたかのように風景まで頭に残っている。妹が元気になってから何十回も遊びに行っているが、自分の家以外で落ち着けるのはここだけだと思う。

自分の将来の旦那さんや子どもたちをぜひ連れていきたい。そんな大切な場所だ。